人生100年 健やかに生きる
～体育・スポーツとともに～ (35)

北 良夫（92）

オリンピックが身近に（その2）

県内駆け抜けた聖火

1959（昭和34）年ミュンヘンで開かれたIOC総会で、64（昭和39）年オリンピックを東京で開催することを正式に決定した。アジア地域で初めてとなるオリンピックの開催に、スポーツ関係者はもとより国民は喜びに沸いた。しかし期待していた柔道の正式開催は認められず、日本柔道界は消沈。この難関を救ったのが天理教2代真柱中山正善氏であったことを知る人は少ない。

中山正善氏は、推されて46（昭和21）年、戦後初の奈良県体育運動連盟（現スポーツ協会）会長に就任、柔道をはじめ水泳、スキーなどの会長も務められて、奈良県スポーツの振興に尽くされた。中でも柔道は自らも実践者として活動、柔道の発展を願って、奈良天理道場を建設されて、日本国内はもとより、世界の柔道愛好家の心技体の学び舎として供してこられた。東京オリンピック無差別級の金メダリスト、オランダのヘーシンクもここで学んだ。（以下2007年11月発行「天理時報」参照）

1958年、東京オリンピック開催が決まる前年、東京で開かれたIOC総会の閉会後、ブランデージ会長は委員とともに天理教を訪問された。この訪問はブランデージ会長の考古学、民俗学の学術的関心によるものであり、中山真柱との親交を深められる機会ともなった。

その後、東京オリンピックに採用されなかった柔道の復活に、日本柔道連盟は61（昭和36）年に開かれる、アテネでのIOC総会に中山真柱の派遣を決めた。柔道連盟の要請を受けた中山真柱は、IOC総会に出席して、かねてから親交のあったブランデージ会長に柔道の採用を働きかけられた。その努力があって、東京大会で柔道の開催が決まった。

アテネに同行していた関係者は、この時の真柱の行動は「大変な数日間であった」と、当時の真柱のご心痛を綴っている。今年の第33回パリオリンピックでも、柔道の日本選手の活躍はもとより、世界の柔道界の発展は目覚ましいものがあった。60年前の中山真柱の柔道への情熱が、今に生かされていることを思うと、熱く心に迫るものがある。

64年8月21日、ギリシャオリンピアヘラ神殿で点火された聖火は、空路沖縄に到着、その後日本国内を4か所のコースに分かれて、およそ10万人のランナーによって引き継がれ、東京オリンピック会場を目指した。奈良県には9月27日和歌山県から五條市で、第1走者岡田八詠子選手（天理大・水泳）に引き継がれ、国道24号線を北上、小雨降る奈良県庁に到着した。夕刻聖火は小雨の中を、奈良市鴻ノ池運動公園野球場に運ばれ、およそ5千人の市民が見守る中、設けられた聖火台に点火。式典の後、グラウンドで待機していた市立一条高校男子生徒による、組み体操が披露された。

翌日再び県庁前を出発した聖火は、県内最後の3区間で運ばれて、京都との県境奈良市梅谷口で京都に引き継がれた。筆者は奈良県聖火リレー県実行委員会委員として、県内49区間約55キロ、走者1127人を車で伴走した。アジアで初めての開催となったオリンピック東京大会は、今も深く脳裏に刻まれ、心に残る大会である。

1964年の東京オリンピックで、パトカーを先頭に聖火を京都へ運ぶ一条高の陸上部員たち（筆者提供）

＝第4土曜日掲載＝